

# ホエールウォッチングの実態

[ホーム](#) > [総合研究所](#) > [海洋生物の調査研究](#) > [研究活動報告](#)

> ホエールウォッチングやホエールスイムツアーによるザトウクジラへの影響調査を関連事業者、海外研究組織と共同で実施しています！

沖縄美ら島財団 総合研究所

## 海洋生物の調査研究

### ホエールウォッチングやホエールスイムツアーによるザトウクジラへの影響調査を関連事業者、海外研究組織と共同で実施しています！

近年、ザトウクジラを対象としたホエールウォッチング産業が国内でも年々拡大傾向にあり、一部の海域では、クジラと泳ぐホエールスイムツアー等の新規事業も開催されています。一方、国外の研究成果からは、**これら観光産業の拡大による、出産数や来遊頭数の減少などの対象鯨類への影響が懸念、示唆されています。**

そこで、（一財）沖縄美ら島財団総合研究センターでは、ザトウクジラの保全と持続的な観光産業の発展を目的として、ホエールウォッチング、スイムツアー事業によるザトウクジラへの影響評価調査に取り組んでいます。この調査は、同分野で数多くの実績を持つPacific Whale Foundation（米国：ハワイ州）のStephanie Stack博士の研究チームや、地元観光事業者の方々と連携して実施しています。今後も皆さんと協力しながら、鯨類への影響を最小限に抑えたツアーのルール作りや持続可能な事業の体制の実現を目指し、同調査を継続的に実施していきます！



ブリーチするザトウクジラ（左上）。沖縄でホエールウォッチング・スイムツアー影響調査を実施する財団職員（左下）。オーストラリアでPacific Whale Foundationの調査に参加し、現地視察する財団職員（右）。

#### お問い合わせ先

総合研究所  
 〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町石川1888番地  
 TEL：0980-48-2266 FAX：0980-48-2200

#### 総合研究所

総合研究所からのお知らせ・イベント

海洋生物の調査研究

研究業績(ウミガメ類)

研究業績(鯨類・海牛類)

URM魚類標本コレクション

Proceedings of Symposia

ザトウクジラ調査

研究スタッフ紹介

研究活動報告

海洋文化の調査研究

琉球文化の調査研究

普及啓発の取り組み

亜熱帯性植物の調査研究

# Ocean Newsletter

オーシャンニュースレター

## 第562号（2024.01.05発行）

### 海の哺乳類にヒトが与えるインパクト

**KEYWORDS** ホエールウォッチング／観光産業／Animal Welfare（動物福祉）

写真家 ◆ 水口博也

いま世界の趨勢は、野生動物と一定の距離をとりながら、穏やかに観察するという方向に向かっている。

一方、日本ではクジラを「愛する」と自称する人々によるハラスメントが横行するホエールスイムがにわかに盛んになっている。

多くの人びとが出かけるようになったホエールウォッチングからいったい何を学ぶべきか。

### ホエールウォッチングのルール

毎年、冬から春まで、北太平洋を回遊するザトウクジラの一部が繁殖と子育てのために、日本近海とりわけ沖縄、奄美群島や小笠原諸島周辺に來遊する。そして、その姿を観察するために、ホエールウォッチングが盛んに行われるようになった。ホエールウォッチングは、まずは米国やカナダで1960年代にはじまったあと、1980～90年代にかけて急速に広まった。この観光産業が、鯨類のみならず多くの海洋生物や海洋環境の保護にむけた意識を大きく高めたことは間違いない。

ちなみに、ボートや船舶で接近することの影響は当初より問題視され、ホエールウォッチングの先進国である米国やカナダでは、対象動物にできるだけ影響を与えないウォッチングの方法が模索されてきた。こうして提案された方法が、現在世界の多くのホエールウォッチングのオペレーターやホエールウォッチャーたちが承知している「接近は100ヤード（約90メートル）まで」や「側方から接近」といった、世界中の多くの国で共有されているものである。

その後2000年をすぎた頃から、世界の各地でクジラが観察できる場所が新たに知られるようになり、ホエールウォッチングという観光産業が世界中に広がった。こうした新興国、新興地でのウォッチングは、かつて米国やカナダで地元の人びとの興味から自然発生的に生まれ、やがてビジネスに成長したのとは異なり、当初からビジネスに焦点をあわせたものになる。また先進国のように、法律による規制（米国で1972年に作られた海洋哺乳類保護法など）がなく効果的な規制ができない国や地域では、ひたすらビジネスからの要請が優先されたものになっている。日本もほぼ同様の状況だが、小笠原諸島にかぎっては、ホエールウォッチングが商業的にはじめられる前に米国、カナダの研究者を招聘して調査を行い、世界の標準ルールに匹敵する観察ルールが作られた。しかしあくまで自主ルールなので、守られていない例があることも聞く。

[最新号のご案内](#)

[アドバイザーボード](#)

[バックナンバー](#)

[読者投稿の募集](#)

[メルマガの登録・解除](#)

[ご意見・ご感想](#)

人と海洋の共生をめざして  
150人のオピニオン



- 米国やカナダでは、1970年代から広く、かつ穏やかな方法でホエールウォッチングが行われてきた。

## ホエールスイムというハラスメント

さらにクジラに大きな影響を与えるというホエールスイムが急速に盛んになっていることにも、大きな懸念がある。海上とくらはてはるかに視界がきかない海中でクジラを観察しようとするれば、数メートルの距離にまで接近する必要がある。それが体長十数メートルの動物を観察する距離として、異常な接近距離であることは言をまたない。ホエールスイムが行われている各地では、一般のホエールウォッチング以上に近距離まで船舶やボートが接近することによるクジラの生態や行動への影響は、数多くの調査で明らかになっている。幸いザトウクジラは、近年世界中の海で個体数を増やしており、それぞれの海域での増加率等も調査されているが、長くホエールスイムが行われてきたトンガを繁殖海域にもつ個体群の増加率が、他の海域のそれより低いことは指摘されている。

日本でのホエールスイムを懸念する、より大きな理由は、対象となる沖縄、奄美群島の海が、ザトウクジラの出産や子育てのための海域であることだ。トンガも同様だが、こうした海での船舶やボートの接近、あるいはスイマーの際だった接近は、親子の授乳や休息の時間を奪うことになる。とりわけ繁殖海域でのザトウクジラの母親は、ずっと採餌することなく子育てに専念する。人間の接近によって母子クジラが不必要に潜ったり、休息を諦めなければならない状況は許容できるものではない。

ホエールウォッチングの世界的な標準ルールからいえば、極端といえるほどにクジラに接近するホエールスイムが、ハラスメントにあたることは、個体群の増加率などから科学的に証明されているといっている。保護先進国である米国やカナダでは、ホエールスイムはいつさい禁止されている。ただし、そのレジャーを行う責任を参加者にのみ押しつけるわけにはいかない。自然教育に尽力すべきであり、こうした内容を機会があるごとに発信すべき研究者や、そうした科学的な成果を事業に反映させるべき業者らが、世界に通用する観察方法についてより真摯に議論すべきだろう。

近年はこうした批判をさけるために「クジラの生態に影響を与えないように配慮しながら」と銘うつホエールスイムのオペレーターも出はじめているが、具体的な方法や根拠は示されていない。そうした態度は「サステイナブルな触れあい」ではなく、「サステイナブルなハラスメント」を促進するものであり、「自分は野生動物にインパクトを与えないで観察したい」と思う人びとの思いを利用しながら、そうした人びとの真摯な思いを裏切る不誠実な宣伝文句といわざるを得ない。SNSには、水中で目前にいるクジラが、胸びれや尾びれを激しく動かして海面を泡だてている写真が投稿され、明らかに強引な接近がなされていることがわかれるが、そうした投稿に「クジラ好き」と自称する人びとの「いいね」が集中する。それが矛盾に満ちた行為であることは、どうすれば理解されるのだろう。



■ ザトウクジラが尾びれを海面に見せて深く潜りはじめる。

## 環境モニターとしてのホエールウォッチング

いま気候変動やプラスチックゴミなどの問題で、クジラを含む野生動物がすでにさまざまなストレスを受けている。せめてそれ以外のストレスを少なくすることは、環境モニターとしてのホエールウォッチングの価値を高める意味でも、きわめて優先すべき作業である。

いまの日本のなかでとるべきことは、まずは本稿の最初に紹介した世界の標準的なルールを厳守することだ。自身でルールづくりが進まない日本のような国ではひとつの便利な道だろう。

鯨類の仲間であるイルカについては、海洋哺乳類保護法がある米国では珍しく、**ハワイでハシナガイルカを対象にドルフィンスイムが行われていた。しかし、イルカたちの生態に与える影響が以前から指摘され、近年中止されるにいたった。カナダのハドソン湾では、ペルーガ（シロイルカ）と泳ぐツアーがあったが、これもペルーガの生態に与える影響が懸念され、この類いのツアーは催されなくなった。**

世界の趨勢は、野生動物と一定の距離をとりながら、穏やかに観察するという方向に大きく舵をきっている。一方日本では、「エコツアー」という看板のもと、「イルカ好き」と自称する人びとがドルフィンスイムに熱中する。化石燃料を燃やしつづけて、幼い子どもをつれた母クジラを追いまわしながら「クジラとの感動の出会い」を謳うという欺瞞から、そしてAnimal Welfare（動物福祉）の観点からも、そろそろ決別すべきときである。（了）

## 第562号（2024.01.05発行）のその他の記事

### ● [海洋と気候変動 ～『IPCC第6次評価報告書』からの示唆～](#)

独・アルフレッド・ウェゲナー極地・海洋研究所、IPCC第6次評価サイクル第2作業部会共同議長  
◆Hans-Otto POERTNER、独・アルフレッド・ウェゲナー極地・海洋研究所◆Sina LOESCHKE

### ● [資源管理と水産加工業の振興を通じた水産業の変革 ～函館市を例として～](#)

（公財）笹川平和財団海洋政策研究所研究員◆田中元

### ● [海の哺乳類にヒトが与えるインパクト](#)

写真家◆水口博也

### ● [編集後記](#)

（公財）笹川平和財団海洋政策研究所所長◆阪口秀

[バックナンバーはこちら](#)

TOP SDGsに取り組む

【繁殖のために毎年やって来る！】沿岸で回遊するクジラを保護するためにオーストラリアが実施する取り組みとは？

# 【繁殖のために毎年やって来る！】沿岸で回遊するクジラを保護するためにオーストラリアが実施する取り組みとは？

2024.11.18

#SDGsに取り組む



オーストラリアで人気のアクティビティ



取材・インタビュー



## RANKING



大阪万博パビリ...



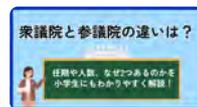
【2026年4月...



与党と野党の違...



【2025年最新...



衆議院と参議院...



【わかりやすく...

SDGsの取り組み [➡](#)

SDGs最新ニュース [➡](#)

コラム お問い合わせ

毎年多くのクジラがオーストラリアの海を回遊しており、ゴールドコーストやシドニーをはじめとするさまざまなエリアでクジラを観察できます。

しかし、ホエールウォッチングはボートに乗ってクジラの観察を行うことから、ボートとの衝突、モーター音などによる水中の騒音公害、塗料の水質汚染といった問題点も指摘されてきました。

そこで今回は、オーストラリアがどのようにクジラへ配慮しながらホエールウォッチングを行っているのかを解説していきます。

### 目次

- 1. ザトウクジラの繁殖とオーストラリア
- 2. ホエールウォッチングのベストシーズンは約半年間

もっとみる 

## ザトウクジラの繁殖とオーストラリア

SDGs用語集



コラム



### INTERVIEW



株式会社  
こまむ...



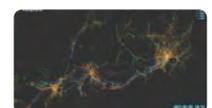
【SDGs  
未来都...



ジュエリー  
ーブラ...



サラヤ株  
式会社...



株式会社  
Agoop...



株式会社  
ウチヤ...



株式会社  
新澤醸...

います。

南半球で生息するザトウクジラは、夏場  
は南極海に生息して餌となるオキアミな  
どを食べています。

しかし、毎年冬になると交尾や出産のため  
に暖かい海域へ北上するという特徴が  
あり、その数は実に6万頭にも及びます。

タスマニア州の近くで分岐するのが  
25,000頭、オーストラリアの西海岸を北  
上し続けるのが35,000頭ほどで、年間の  
最大移動距離は1万kmです。

ザトウクジラは最大体長16mとされてお  
り、大勢の個体が移動するため遠くから  
でも泳いでいる姿を確認できます。

## ホエールウォッチングの ベストシーズンは約半年 間

オーストラリアのさまざまな地域におい  
て、ホエールウォッチングツアーが催行  
されていることはご存知でしょうか？

どんなにたくさんのクジラがオーストラ  
リアを通過していても、その姿を間近に  
見ることは非常に困難です。

「できるだけ近くでクジラを観察したい」  
「実際に泳いでいるところを見たい」  
という人々のために、オーストラリアではザトウクジラの生態を学ぶ機会としてホエールウォッチングツアーを行っています。

ザトウクジラがいつどこを移動するかという正確な時期については、水温、海氷、獲物の量、餌場の位置などによって毎年少しずつ異なります。

一般的に北上する期間は6～8月、南極海に戻るのは9～11月と言われており、ホエールウォッチングのベストシーズンは1年間で半年ほどです。

ただし、オフシーズンであっても全く見られないというわけではないので、年間を通して楽しめるアクティビティとして知られています。

尚、クジラは一斉にまとまって移動するわけではなく、まずは若いオスからスタートします。

そのあとをメスや子どもたちが追うように泳ぎ始めるため、全ての個体がオーストラリアの沖を通過するまでに一定期間あるのが特徴です。

## オーストラリアでクジラ



取材・インタビ  
ュー

コラ  
ム

お問  
い合  
わ  
せ

## が見られるエリアとは？

海に囲まれているオーストラリアでは、比較的多くのエリアでクジラを観察できます。

タスマニア州や南オーストラリア州などの田舎はもちろん、シドニーやゴールドコーストといった都市部でもホエールウォッチングツアーが実施されており、観光のついでに気軽にクジラの姿を眺められます。

2～2時間半程度のツアーが一般的ですが、ツアー会社によって金額やルートはさまざまです。

## クジラを守るための取り

### 組み

オーストラリアで人気のホエールウォッチングですが、クジラへの悪影響も懸念されてきました。

複数の船によるクジラの追跡やモーター・エンジン音による水中の騒音公害は、クジラの呼吸パターンの乱れやストレス増加を引き起こす可能性があります。

指摘されています。

クジラの精神的ストレスや外傷に繋がる恐れもあることから、オーストラリアではクジラの安全を守りながらクジラについて学べるように以下のような工夫を取り入れてきました。

## 適切な距離感を維持する

1972年、海洋哺乳類保護法 (MMPA) は海洋哺乳類の採取を禁止しました。

海洋哺乳類保護法は鯨類の保護を目的としており、狩猟、捕獲、収集はもちろん、海洋哺乳類に対する嫌がらせ行為も禁止事項に含まれています。

クジラに接近することでクジラ健康状態や生態に悪影響を及ぼす可能性があることから、オーストラリアのホエールウォッチングツアーではクジラから少なくとも100mの距離を保つように提案しています。

また、クジラの方からボートに接近するケースも多くなっていますが、例えクジラが近寄ってきても餌をあげたり触れたりすることはできません。

あくまで自然の中で暮らすクジラを観察するだけに留めることで、クジラへの身

尚、個人でボート、カヤック、ジェットスターなどに乗っているときにクジラに遭遇した場合も、クジラの回遊を邪魔しないように移動することが推奨されています。

## 警戒区域の設定

警戒区域とは、クジラから300m、イルカからは150mまでの距離のことを指します。

警戒区域にいるボートは時速10km以内での航行が義務付けられており、航行による泡などが発生する場合は減速する決まりです。

尚、ボートが一定距離を保っていても、クジラ側がボートに接近してくることも多くなっています。

クジラが船に接近して警戒区域内に入った場合、通常のルールと同様に時速10km以内で航行して距離を取る必要があります。

## 進入禁止ゾーンの設定

警戒区域内には、ボートの立ち入りNGの進入禁止区域が設定されています。

クジラの場合は周囲100m、前後300mの

尚、海洋哺乳類の方から近づいてきたときは、可能であれば時速10km以内で航行して距離を取る、難しい場合はボートのエンジンを切るといった対応が求められます。

### 3ボートルール

警戒区域内に3隻のボートがいる場合、4隻目以降はそのエリアに入れない決まりになっています。

もし警戒区域内に入るのを待っているボートがいる場合、既に入っている3隻はクジラの観察後に速やかに次のボートに順番を譲るよう推奨されています。

### 収益の寄付

ホエールウォッチングツアーを実施している団体の多くは、売上の一部をクジラの保護団体へ寄付しています。

寄付金はクジラの研究や保護活動に役立てられており、ツアーに参加することで間接的に保全活動に貢献できます。

### クジラの周辺環境の観察

ホエールウォッチングを行うにあたって、スタッフが注目するのはクジラだけ

プラスチック問題が深刻化している昨今、クジラ、イルカ、ウミガメをはじめとするさまざまな海洋生物がビニール袋やゴム風船をクラゲと間違えて誤飲する事故が多発しています。

プラスチック製品を誤飲した場合、窒息や腸閉塞による栄養失調を引き起こす可能性が高いです。

多くの海洋生物がプラスチック製品の誤飲によって命を落としていることから、ホエールウォッチングのスタッフはツアー中に海の中にビニール袋やゴム風船が落ちていないかを確認しています。

ホエールウォッチングのボートにはグラブフックと呼ばれるカギ状のツールが積み込まれており、プラスチック製品を発見した際にはグラブフックを使って危険物の除去を行っています。

## 環境に優しいボート

ホエールウォッチングツアーを行っている会社はたくさんありますが、ボートそのものが海洋汚染に繋がる恐れもあります。

そのため、ボートへの乳化剤や洗剤の不使用、廃棄物管理システム、オイルや塗料の見直しといった対策と設計によって

## クジラの研究

どんなにクジラに配慮しながらホエールウォッチングを行っても、クジラのストレスレベルを明確にすることは難しい傾向にあります。

そこで、クジラの科学者、研究者、ホエールウォッチングのスタッフが一丸となり、クジラの行動パターンや好みを把握するために海に出てデータを収集しています。

若いオス、メス、子どもなど、オーストラリアの海で見られるクジラのタイプはさまざまです。

タイプによって人に対するストレスレベルが異なることもあるため、科学者、研究者、ホエールウォッチングのスタッフはクジラの観察及び統計解析を行うことでよりサステイナブルなホエールウォッチングを目指しています。

## まとめ

動物を観察対象としているホエールウォッチング。

不適切な運営でクジラに身体的・精神的影響がかからないように、オーストラリア

アではホエールウォッチングに関するさまざまな取り組みが行われています。

私たちが野生下で生息する動物を観察するときは、動物や周囲の環境への配慮を怠らないように気を付けていきましょう。

この記事を書いた人

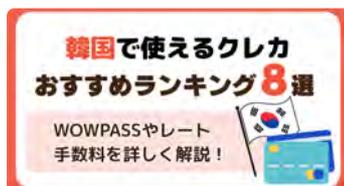


**Mahogany\_socks** ライター

オーストラリアでの大学院留学を経て、現在は現地で動物関係の...

← 前の記事へ 次の記事へ →

### 関連記事



【徹底比較】韓国...

2025.09.10



【最新比較】ク...

2025.09.10



# ホエールウォッチング

ホエールウォッチングは、クジラやイルカ（鯨類）をその自然の生息地で観察する行為です。ホエールウォッチングは主にレクリエーション活動（バードウォッチングを参照）ですが、科学的または教育的な目的にも使用できます。<sup>[1]</sup>国際動物福祉基金（IFAW）が2009年に実施した調査によると、2008年には世界で1,300万人がホエールウォッチングに行ったと推定されています。ホエールウォッチングは世界中で年間21億ドルの観光収入を生み出し、約13,000人の雇用を生み出しています。<sup>[2]</sup>この産業の規模と急速な成長は、天然資源としてのクジラの最善の利用方法について、捕鯨業界との複雑で継続的な議論につながっています。

## 歴史

組織的なホエールウォッチングは、サンディエゴのカブリロ国立公園がコククジラの移動を観察するための公共の場所と指定されたときに米国で始まりました。この光景は、初年度の1950年に10,000人の訪問者を集めました。<sup>[1]</sup>1955年に、同じ地域で最初的水上ホエールウォッチングが開始され、より近い場所でクジラを見るために1回の旅行につき1ドルの料金がかかりました。<sup>[1]</sup>その後10年間で、この産業は米国西海岸全体に広がりました。<sup>[1]</sup>

1971年、モントリオール動物学会は北米東部で初の商業ホエールウォッチング活動を開始し、セントローレンス川でナガスクジラとシロイルカを観察するツアーを提供しました。<sup>[1]</sup>1970年代半ばまでに、水族館向けの生きた捕獲によって、ブリティッシュコロンビア州とワシントン州の沿岸海域のシャチの個体数、特に南部の定住型シャチの個体数は減少しました。科学的な記録者によると、1980年代には商業ホエールウォッチングがシャチを観察し、鑑賞する代替手段となり始めました。<sup>[3]</sup>1984年、ブリティッシュコロンビア州のシャチたちと多くの時間を過ごしたエリック・ホイトは、ホエールウォッチングに関する初の包括的な書籍『ホエールウォッチャーズ・ハンドブック』を出版しました。マーク・カーワーディンはBBCワイルドライフ誌で、この本を自身最高の「自然の古典」と呼びました。<sup>[4]</sup>

1985年までに、ニューイングランドからのクジラ観察者の数はカリフォルニアを上回りました。この地域の急速な増加は、ザトウクジラの個体数が比較的多く、ブリーチング（水面からのジャンプ）や尾を叩くといったアクロバティックな行動が観察者を魅了したこと、そしてクジラの個体群が大都市に近接していたことによるものとされています。<sup>[5]</sup>



アルゼンチン、バルデス半島でミナミセキクジラを観察



マサチューセッツ州プロビンスタウンのキャプテン・ジョン&サンズ社のホエールウォッチング船

ホエールウォッチング観光は1980年代半ば以降、大幅に成長しました。世界初のホエールウォッチング調査は、1992年にクジラ・イルカ保護協会（WDCS）のためにホイトによって実施されました。この調査は1995年に更新され、生きたクジラの価値を示すものとして、英国政府によって国際捕鯨委員会（IWC）の会合に提出されました。

[5] 1999年、国際動物福祉基金（IFAW）はホイトにさらなる拡張を依頼し、その調査は2001年に発表されました。[5] 2009年に経済学者チームによって調査が完了し、この報告書では、2008年には1,300万人がホエールウォッチングに参加したと推定され、10年前の900万人から増加しています。商業的なホエールウォッチング事業は119カ国で確認されました。ホエールウォッチング旅行の直接的な収入は8億7,270万米ドルと推定され、21億1,310万米ドルの間接収入がホエールウォッチャーによって観光関連事業に費やされた。[2]

ホエールウォッチングは発展途上国にとって特に重要です。沿岸地域社会はクジラの存在から直接利益を得始めており、海洋保護区や聖域を利用して商業捕鯨や混獲、船舶衝突などの脅威からこれらの動物を保護することに対する国民の支持を大きく高めています。2007年、ヒューメイン・ソサエティ・インターナショナルはペルー沿岸部にホエールウォッチングを紹介するためのワークショップシリーズを後援し、ホイト氏に高品質で持続可能なホエールウォッチングの青写真の作成を依頼しました。[6] このマニュアルは後にWDCS、IFAW、Global Oceanの共同後援によりスペイン語、フランス語、インドネシア語、日本語、中国語、オランダ語に翻訳され、2012年には電子書籍として英語版が出版されました。[6]

## 保全

ホエールウォッチングの回数と船の大型化の急増は、クジラの行動、回遊パターン、繁殖周期に影響を与える可能性があります。ホエールウォッチングがクジラやイルカの生態に重大な影響を与える可能性があるという強力な証拠が今や存在します。

環境保護活動家たちは、一部の船主の「一攫千金」志向を懸念し、すべてのホエールウォッチング事業者に対し、ホエールウォッチングに関する地域の規制に協力するよう強く求め続けています（クジラの種類や個体数が極めて多様であるため、国際標準の規制は存在しません）。一般的な規則には以下のものがあります。

- 速度を最小にする/「航跡なし」の速度
- 急な曲がり角を避ける



メイン州バーハーバー沖でのホエールウォッチング



カリフォルニア州モンテレー湾のザトウクジラとカリフォルニアアシカ（2013年）



カリフォルニア州アビラビーチ沖のザトウクジラとカッシュクペリカン



クジラとその保護について講演するホエールウォッチングのオペレーター

- ノイズを最小限に抑える
- クジラを追いかけたり、囲んだり、間に入らないでください
- 動物が驚かされない角度から近づく
- 累積的な影響を考慮する - 一度に/1日あたりのボートの数を最小限に抑える
- イルカを船首に乗るよう強制しないでください。
- イルカと一緒に泳ぐことを許可しないこと。（この最後のルールは物議を醸しており、例えばカリブ海ではしばしば無視される。）ニュージーランドでは、海洋哺乳類保護法に基づいて採択された規則により、イルカやアザラシと一緒に泳ぐことは明確に許可されているが、若いイルカや若いイルカを含むイルカの群れと一緒に泳ぐことは許可されていない。<sup>[7]</sup>

（出典：WDCS）

海岸からクジラを観察することができるウルグアイでは、立法者が国の領海をクジラとイルカの保護区に指定した。<sup>[8]</sup>クジラから300メートル以内に近づくことは違法である。

ミルスタインの研究は、ホエールウォッチングツアーオペレーターによるコミュニケーションが、人間と自然の関係を形成する重要な媒介力であることを強調しています。ミルスタインは、生態学的視点を取り入れることで、クジラと人間の両方をより広い生態系の中に位置づけることができると示唆しています。こうした教訓はより広範囲に適用でき、特定の種に焦点を当てた野生生物観光の取引的な性質を軽減することができます。<sup>[9][10]</sup>

## 場所

ホエールウォッチングツアーは、様々な場所や気候で開催されています。エリア別にご紹介します。

### 大西洋とインド洋

#### 南アフリカ

南アフリカのハーマナスという町は、世界有数のホエールウォッチングの中心地です。5月から12月にかけては、ミナミセミクジラがケープ半島の海岸線に非常に接近するため、ホテルからクジラを観察することができます。町では「ホエールクライヤー」（タウンクライヤー参照）が町中を巡回し、クジラの見撃場所をアナウンスしています。



近すぎる例



メキシコ、バハ・カリフォルニア・スル州のエル・ビスカイノ生物圏保護区では、クジラと接触しながら入ろうとする人がいます。これはほとんどのホエールウォッチャーに推奨されていません。

ハーマナスでは、崖の上やボート、上空からクジラを観察できます。ハーマナスニューハーバーからはボートでのホエールウォッチングツアーが催行されており、6月から12月中旬までミナミセミクジラを観察できます。ポートエリザベスでは、ポートエリザベス港からボートでのホエールウォッチングツアーを催行しており、7月から11月まではミナミセミクジラ、6月から8月と11月から1月まではザトウクジラ、一年中ニタリクジラを間近で観察できます。また、アルゴア湾の西端にあるレシフェ岬の灯台からはザトウクジラ、海岸沿いの観察ポイントからはミナミセミクジラを見ることができます。ボートでのホエールウォッチング(およびイルカウォッチング)は、プレッテンバーグベイなど南アフリカの他の多くの沿岸の町でも人気の高い観光スポットです。プレッテンバーグベイでは、この産業がプレッテンバーグベイを拠点とするボランティア海洋保護団体を通じて保護活動や教育活動にもつながっています。プレッテンバーグ湾には、冬にはミナミセミクジラ、夏にはザトウクジラが訪れます。ニタリクジラは年間を通じて留まっています。[5]もう一つの有名なホエールウォッチングの中心地はフォールズ湾です。ツアーはゴードン湾を出発し、湾の周りの海岸に沿って行きます。見られる種には、ミナミセミクジラ、ザトウクジラ、ニタリクジラが含まれます。冬にはシャチもいます。訪れる種には、ゴンドウクジラとコマッコウクジラが含まれます。ヘビサイドイルカを含む多くの種類のイルカに遭遇できます。同じツアーには、シール島のホホジロザメやサイモンズタウンのアフリカペンギンコロニーも含まれます。



南アフリカ、フォールズ湾のニタリクジラ

## 南西大西洋 - アルゼンチン、ブラジル、ウルグアイ

ブラジルでは、南半球の冬と春の繁殖期に、バイア州サルバドル沖とアブロリョス国立海洋公園でザトウクジラが観察されます。同様に、同じ時期にサンタカタリーナ州とエスピリトサント島の沿岸でミナミセミクジラが観察されます。母子クジラは海岸から30メートル(約100フィート)まで接近することがあります。ホエールウォッチングによる収入は沿岸地域のコミュニティを支え、インビトゥバ町はブラジルの「クジラの首都」となっています。



ブラジル、サンパウロ北部のバイア・デ・カステルハノスでニタリクジラがブリーチング

アルゼンチンでは、パタゴニアのバルデス半島が(冬季に)最大の繁殖地となり、鯨保護協会と海洋同盟の記録によると2,000頭を超えるクジラが生息している。[11]この地域には6つの自然保護区があり、特にプエルト・ピラミデスの町とプエルト・マドリン市の周辺は世界でも有数のホエールウォッチングの目的地とされており、クジラがメインビーチから200メートル(660フィート)以内に接近し、この地域の大規模なエコツーリズム産業で大きな役割を果たしている。[5]

ウルグアイでは、6月から11月まで、マルドナドとロチャの2つの沿岸県のビーチからミナミセミクジラを観察できます。[12]マルドナドで最も多く目撃される地点は、プンタ・デル・エステのプンタ・コロラダ、プンタ・ネグラ、プラヤ・マンサ、プンタ・サリナス、そしてロチャのラ・パロマとラ・ペドレラのビーチ沖です。[13]

## 北東大西洋

潮汐の影響を受ける海峡、入り江、ラグーン、そして水温の変動は、多様な鯨類の生息地を提供しています。多くの鯨類がイギリス、アイルランド、アイスランド、スカンジナビア、ポルトガル、スペイン、フランスの沿岸に生息しています。イギリスとアイルランドからスペインとフランスへビスケー湾を渡る商用カーフェリーは、巨大なシロナガスクジラやはるかに小型のネズミイルカをしばしば見かけます。陸上ツアーでは、これらの動物を観察できることが多いです。

アイルランド南岸沖では、7月から2月にかけて、組織的なホエールウォッチング旅行でザトウクジラやナガスクジラが定期的に見られます。一年を通して見られる種には、ミンククジラ、シャチ、ネズミイルカ、そしてマイルカ、バンドウイルカ、ハナゴンドウが含まれます。また、シャノン川河口にはバンドウイルカの群れが生息しており、一年中観光客を魅了しています。チャノンリーポイントは、イギリスでバンドウイルカを見るのに最適な場所の一つです。<sup>[14]</sup>イルカは岸から見ることができ、特に上げ潮の時には、強い流れの中で遊泳したり魚釣りをしたりする姿がよく見られます。ネズミイルカやハイイロアザラシなどの他の野生生物も定期的に見ることができます。

ノルウェー北部（ヌールラン県およびトロムス県）では、ニシンが冬を越すためにフィヨルドに集まり、夏にはロフォーテン諸島沖で過ごすため、ヴェストフィヨルド、ティスフィヨルド、オフトフィヨルド、アンドフィヨルドでシャチを見ることができます。ヴェステローレン島のアンドーヤ島のアンデネスとトロムス島のクロットーヤ周辺では、マッコウクジラを一年中観察できます。夏のホエールウォッチングツアーは5月から9月まで、シャチやザトウクジラの冬のツアーは10月から4月まで運行されています。トロムスでもマッコウクジラなどのクジラのホエールウォッチングを楽しめます。マッコウクジラが集まる大陸棚エガカンテンと深海は海岸に非常に近く、アンデネス港からわずか7,000メートル（23,000フィート）のところから始まります。

ポルトガルでは、アルガルヴェ地方でホエールウォッチングが楽しめます。ラゴスとポルティマオンは、最も重要なホエールウォッチングスポットです。この地域で観察されるクジラの種類は、ナガスクジラ、シャチ、ゴンドウクジラ、そしてバンドウイルカ、マイルカ、スジイルカです。

北東大西洋の中央、マデイラ諸島、アゾレス諸島、カーボベルデ諸島周辺では、保護活動や教育活動の強化により、ホエールウォッチングの人气が高まっています。これらの地域で最も一般的なクジラの一つはマッコウクジラで、特に出産期のメスの群れがよく見られます。

スペインでは、ジブラルタル海峡、カナリア諸島、ビスケー湾でホエールウォッチングが楽しめます。タリファはジブラルタル海峡で最も重要なホエールウォッチングの町です。地中海への玄関口であるこの町は、北の冷たい海とアフリカ沖の熱帯海域の中心地でもあり、回遊するクジラ類の良いルートとなっています。この地域で観察される種は、バンドウイルカ、マイルカ、シマイルカ、ゴンドウクジラ、マッコウクジラ、ナガスクジラ、シャチです。カナリア諸島では、これらの種のほか、シロナガスクジラ、ハナゴンドウ、オキゴンドウ、ニタリクジラ、マダライルカ、シワハイルカ、ハナゴンドウなどを見ることができます。

アイスランドでは、エイヤフィヨルズル、ブライザフィヨルズル、スキャルファンディ、ファクサフロイでクジラを見ることができます。ホエールウォッチングを提供している町は、ダルヴィーク、ハウガネス、フーサヴィーク、アークレイリ、ホルマヴィーク、グルンダルフィヨルズル、レイキャビクです。最も一般的なのは、ミンククジラ、ザトウクジラ、シロナガスクジラ、シャチクジラ、マッコウクジラ、シロクジラ、ネズミイルカです。

## 北西大西洋

アメリカ合衆国のニューイングランドとロングアイランド東海岸沖では、天候と正確な場所に依じて、通常春の中頃から10月頃までホエールウォッチングのシーズンとなります。ザトウクジラ、ナガスクジラ、ミンククジラ、そして絶滅が危惧され嚴重に保護されている大西洋セミクジラがよく観察されるのは、この海域です。何世代にもわたり、メイン湾やステルワーゲンバンク国立海洋保護区（ケープコッドの鉤状の形状によって形成された内海の一部）などの海域は、これらの種にとって重要な餌場となってきました。今日でも、東海岸沖の海域の大部分は、イカナゴやその他の栄養価の高い餌が豊富で、母親が子クジラに餌を教えることができます。[5]



マサチューセッツ州ステルワーゲンバンク国立海洋保護区でジャンプするザトウクジラ。この地域ではよく見られる行動です。

かつてこの地域は米国の捕鯨産業の中心地であり、特にマサチューセッツ州沖のナンタケット島が盛んだった。捕鯨は長年禁止されており、厳しい法律でこれらの大型野生哺乳類への危害を加えることは禁じられているが、特に好奇心旺盛な子クジラや若いクジラが、ホエールウォッチング船に招かれもしないのに近づいてくることは珍しくない。例えば、若いザトウクジラが船に近づき、乗船している人間をよく見ようと飛び跳ねることは特に珍しいことではない。近年では、ニューヨーク市やボストンなどの港でこれらの動物が遊んだり餌を食べたりするのを目にすることも珍しくなく、最近ではクジラの興味を引く魚種が驚くほどの数で戻ってきている。2011年現在、コーネル大学の専門家がニューヨーク港下部のヴェラッツァーノ・ナローズ橋のすぐ近くでザトウクジラ、ナガスクジラ、巨大なシロナガスクジラなど6種のクジラの鳴き声を録音しており、クイーンズのロッカウェイ半島から海洋生物ツアーを提供する会社が少なくとも1社ある。[15][16]これらの訪問がますます頻繁になっているため、新しい法律が船員、商業漁師、およびクジラ自身の安全を対象としている。たとえばボストン沖では、貨物船ははるかに遅い大西洋セミクジラを保護するために速度を落とさなければならない。また、交通量の多いニューヨーク市周辺の海域では、誤ってクジラに衝突することを避けるために、船にクジラの存在と位置を警告できる装置を設置する話がある。[16]海岸から容易にアクセスできる範囲にクジラやイルカが比較的多く生息しているため、ウッズホール海洋研究所やリバーヘッド財団などのセンターでクジラ目の研究が行われています。

カナダ東部では、セントローレンス川の河口や湾、ニューファンドランド・ラブラドル州、ケベック州、ノバスコシア州、ニューブランズウィック州で、ホエールウォッチングツアーが数多く催行されています。ニューファンドランド・ラブラドル州の海域には22種のクジラやイルカが頻繁に現れますが、最も一般的なのはザトウクジラ、ミンククジラ、ナガスクジラ、シロイルカ、シャチです。もう1つの人気のホエールウォッチングエリアはケベック州のタドゥサックで、シロイルカはサグネ川からセントローレンス湾の内陸部に流れ込む非常に深い場所と冷たい淡水が混ざり合う場所を好みます。ザトウクジラ、ミンククジラ、ナガスクジラ、シロナガスクジラもタドゥサック沖で頻繁に見られます。ファンディ湾は、大型のヒゲクジラやその他多数の海の生物にとって同様に重要な餌場です。この海域はアメリカ大陸と回遊するザトウクジラの個体群を共有しており、子連れのセミクジラの母クジラの夏の育成場として知られている。[5]



セントローレンス川の河口、ケベック州タドゥサック近郊でのホエールウォッチング

アメリカ東海岸、バージニア州バージニアビーチでは、12月末から3月中旬にかけてホエールウォッチングが冬のアクティビティとして楽しめます。バージニア水族館・海洋科学センターが運営するホエールウォッチングのボートツアーでは、バージニアビーチ沖でナガスクジラ、ザトウクジラ、セミクジラを見ることができます。[17]目撃されるのは主に若いクジラで、餌が豊富なチェサピーク湾の河口付近に留まり、成体は交尾のためにカリブ海へ向かいます。「ママ」と「パパ」は、家族全員が夏を過ごす北へ戻る途中で、子孫を迎えに行きます。

カヤックツアーをベースにしたエコツーリズムは、サラソタ・キーズのような温水域のリゾート地で人気が高まっています。ガイド付きのカヤックツアーでは、地元の生態系を巡るツアーに参加できます。カヤックでは、湾の浅瀬でイルカのジャンプやマナティーが海草を食べる様子を見ることができます。[18]



フロリダ州リドキー周辺で、エコツアーガイドがカヤックに乗ってイルカやマナティーを観察している。

バージニア州周辺の海域は、絶滅危惧種であるタイセイヨウセミクジラの回遊経路としても知られています。妊娠中の雌は、ジョージア州とフロリダ州の沿岸部にある産卵地に到達するために、12月頃にこの地域を通過しなければなりません。そのため、デルマー半島とフロリダ州北部に向かって南に伸びるバリアー島間の海域は、母クジラが子クジラを出産し、授乳した後、母クジラと子クジラを北上させてニューイングランドやカナダ付近のより冷たい海域へ戻る準備をする時期であり、毎年冬と春に監視する必要があります。

## カリブ海

カリブ海の海域では、ザトウクジラ、マッコウクジラ、アカボウクジラ、その他多くの小型鯨類など、約25種のクジラ類が観察されています。主なホエールウォッチングは、ザトウクジラの繁殖地として知られるドミニカ共和国のサマナ湾で行われています。カリブホエールとカリブ・ホエールウォッチ協会には、持続可能なホエールウォッチング活動に従事する事業者に加え、国際動物福祉基金、ダルハウジー大学、アソシエーション・エバシオン・トロピカルなどの専門家、自然保護活動家、研究団体が参加しています。

## 北インド洋

スリランカの南海岸と東海岸、そしてモルディブでは、この産業が成長しています。冬と夏には、ピグミーシロナガスクジラとマッコウクジラが島の南端を横切り、東南アジアの暖かい海域へと回遊します。スリランカのドンドラ岬では、ミリッサ港またはウェリガマ港からアクセスできる場所で、多くのピグミーシロナガスクジラを見ることができます。スリランカではホエールウォッチングツアーを手配できます。スリランカのミリッサ海では、シロナガスクジラや一部のイルカを見ることができます。11月から4月にかけては、多くの目撃情報が報告されています。

## 北地中海

イタリア、フランス、モナコの海域にある地中海海洋哺乳類ペラゴス保護区には、8種の海洋哺乳類が生息しており、そのほとんどが一年中見られます。[19]夏には、北イタリアのリグーリア州ジェノバ港とインペリア港から頻繁に遠足が出航します。

# 太平洋

## 東太平洋 - コロンビア、エクアドル、パナマ

コロンビアでは、7月下旬から10月上旬にかけて、ソラノ湾とヌキの町に多数のザトウクジラが訪れます。[20]コスタリカ南部のマリノ・バジェーナ国立公園には、クジラが訪れる季節が2つあります。

パナマでは、パール諸島には6月下旬から11月下旬にかけて、推定300頭のザトウクジラが訪れます。パナマシティ発のホエールウォッチングツアーの目玉は、このパール諸島です。チリキ湾では、世界遺産のコイバ島国立公園やボカチカ近郊の島々でホエールウォッチングを楽しむことができます。ペダシ近郊のイグアナ島は、今やホエールウォッチング愛好家に人気のスポットとなっています。いくつかの財団が、地元住民をホエールウォッチングツアーのガイドや船長として育成しています。

エクアドルでは、6月から9月にかけて、ラ・プラタ島（別名リトル・ガラパゴス）やサンタエレナ半島の先端にあるサリナスなど、ザトウクジラの大群を見ることができる場所が数多くあります。[5]



コロンビアのカウカ渓谷にあるウランバ・バイア・マラガ国立自然公園に生息するザトウクジラの種類。クジラが子育てをするお気に入りの場所と考えられており、観光地となっている。

## 北東太平洋 - メキシコとアメリカ合衆国

カナダとアメリカ合衆国の西海岸では、アラスカ（夏季）、ブリティッシュコロンビア州、ワシントン州のサンファン諸島/ピュージェット湾で素晴らしいホエールウォッチングが楽しめ、一年中ほぼ毎日、海岸からクジラが目撃されています。[21]北東太平洋では、定住型、回遊型、沖合型のシャチの3種類のシャチの群れが観察されます。[21][22]

オレゴン州の海岸では、コククジラを中心に数種類のクジラが年間を通じて見ることができ、州ではクジラの移動シーズンである冬季に観光客を支援するボランティアを養成している。[23]カリフォルニア州では、南カリフォルニアの海岸で年間を通じて優れたホエールウォッチングを楽しむ。冬と春（12月～5月）には、コククジラの年次回遊を海岸から見ることができ（ベストスポットはポイント・ビセンテ）、シロナガスクジラは7月から10月の間によく見られる。ナガスクジラ、ミンククジラ、シャチ、さまざまな種類のイルカが年間を通じて見ることができる。[24]春、夏、秋のサンフランシスコ沖のファラロン諸島では、ザトウクジラ、コククジラ、シロナガスクジラが見れることがある。



モントレイ湾でシャチを観察。



ザトウクジラウォッチング（*Megaptera novaeangliae*）、アラスカ州ジュノー、アメリカ合衆国。

メキシコでは、バハ・カリフォルニア・スル州のさまざまなラグーンが2月から3月にかけてコククジラの繁殖地となる。[25][26]ザトウクジラはバハ・カリフォルニア南端沖、[27]メキシコ西海岸のハリスコ州プエルト・バジャルタ沖、[28]メキシコ南海岸のゲレロ州バラ・デ・ポトシ沖

でも見ることができる。<sup>[29]</sup>メキシコの多くの町では、2月前半のゲレロ・ネグロや2月24日と25日のサン・ブラス港などの祭りでクジラの到来を祝う。<sup>[30]</sup>

2021年3月下旬、カリフォルニア州オレンジ郡の海岸線付近で、体長21メートルのシロナガスクジラが目撃されました。これらの哺乳類は通常夏季に見られますが、このシロナガスクジラはシーズンオフで、バルボア桟橋とニューポートビーチの海岸線付近を北上していました。<sup>[31]</sup>

## セントラルパシフィック - ハワイ

毎年冬になると、4,000頭から10,000頭の北太平洋ザトウクジラがアラスカからハワイへ回遊する。アラスカ沿岸の広大な海域では、クジラと遭遇する可能性は高い。夏には、何千頭ものクジラがアラスカの豊かな餌場へと移動した後、目撃情報は非常に多くなる。、ハワイ諸島ザトウクジラ国立海洋保護区の内外で可能である。ハワイでクジラを見るのに最適な場所は、ハワイ諸島間の保護された水路である。ここでクジラを見るのに最適な月は1月と2月で、15分ごとに2頭から4頭のクジラが見られると予想され、<sup>[32]</sup>0頭から20頭の間の変動は通常である。<sup>[33]</sup>

## 西太平洋 - 東アジアおよび東南アジア

アジアの多くの国には、大規模なホエールウォッチング産業がある。2008年の観光客数で最大規模だったのは、中国本土、台湾、日本だった。インド、カンボジア、インドネシア、フィリピン、モルディブでもイルカウォッチングとホエールウォッチングが行われている。中国のイルカウォッチングは、ほぼ広西チワン族自治区の三娘湾に集中している。台湾には東海岸に複数のホエールウォッチング港がある。日本には、主要な島々、沖縄、座間味島、小笠原諸島、御蔵島、三宅島で、様々なホエールウォッチングとイルカウォッチングの事業がある。<sup>[2]</sup>

フィリピンでは、中部ビサヤ諸島のパミラカン、ダバオ湾、バタン諸島のバブヤン諸島北岸、パラワン島のパサレン湾およびマランパヤ湾周辺で、30種を超えるクジラやイルカを観察できます。ビサヤ諸島は特にイルカが見られることで知られ、世界でも有数のフレーザーイルカの生息地です。ビサヤ諸島のイルカは、魚のルアーや商業漁業に引き寄せられます。最北端のバタン州では、少なくとも12種のクジラとイルカが目撃されており、国内で最もクジラ目の多様性が高い場所となっています。フィリピンでは特にホエールウォッチングの季節はないようですが、通常、夏の穏やかな海が最高の条件を提供します。イワワジイルカ、ニタリクジラ、バタン諸島のザトウクジラなど、一部の個体群は回遊性があるようです。他の個体群についてはまだ研究されていません。フィリピンの沿岸部では、かつて捕鯨を行っていた地域もいくつかあり、ホエールウォッチングで収入を得始めています。<sup>[34]</sup>

## 南東太平洋 - チリとペルー

コルコバード湾とグアイテカス諸島の海域では、マダガスカルイルカ、クロイルカ、バンドウイルカ、ザトウクジラ、ミンククジラ、シャチなど、様々なクジラやイルカを見ることができます。<sup>[35]</sup><sup>[36]</sup>コルコバード湾は「南半球全体でおそらく最大のシロナガスクジラの餌場と育成場」です。<sup>[35]</sup>これらすべてが、グアイテカス諸島をホエールウォッチングに最適な場所にしていきます。<sup>[35]</sup>ピニウイル、ケジョン、メリンカの各地域では、地元の漁師がホエールウォッチングツアーを提供しています。<sup>[35]</sup>

## 南西太平洋 - ニューゼalandとオーストラリア

ニューゼalandのカイコウラは、世界的に有名なホエールウォッチングの地です。カイコウラ周辺の海は豊かな海洋生物を育み、町の収入は主にホエールウォッチングやイルカと泳いだり、イルカの周りを泳いだりすることで得られる観光収入によって支えられています。近年、カイコウ

ラのマッコウクジラウォッチングは急速に発展し、今では業界をリードする存在となっており、おそらく世界で最も発展した産業と言えるでしょう。ニュージーランドでの捕鯨の崩壊後、町は不況に陥りました。しかし、近年の発展は、捕鯨ではなくクジラを観察することの利点を訴えるきっかけとなっています。

オーストラリア、クイーンズランド州のサンシャイン・コーストとハービー・ベイ（クジラが回遊前に滞在・休息する場所）は、毎年6月末から11月末まで、ミナミザトウクジラの本エールウォッチングに最適な条件が整っています。近年、クジラの数と活動は著しく増加しています。ニューサウスウェールズ州のシドニー、イーデン、ポート・ステイブンス、ナルーマ、バイロン・ベイも、5月から11月にかけて人気のツアースポットです。

ミナミセミクジラは、オーストラリア南岸沿いで6月から8月にかけて見られます。ビクター・ハーバー近くのエンカウンター湾周辺の海岸から容易に観察できることが多く、ヤラタ近くのグレート・オーストラリアン・バイトの入り口にある崖の上からは、一度に最大100頭のクジラが見られることもあります。オーストラリアの捕鯨も参照してください。

西オーストラリアでは、インド洋南東部のナチュラルスト岬付近と、インド洋と南洋が会うルーウィン岬でクジラが観察されます。

南極海には、陸からも船上からもクジラを見られるスポットがたくさんあります。西オーストラリア州南岸のアルバニーは、南半球で最後の陸上捕鯨基地があった町で、現在では本エールウォッチングが盛んに行われています。ビクトリア州では、ウォーナンブールのローガンズビーチやポートフェアリー、ポートランド沖が人気のスポットです。[37]タスマニア島では、東海岸全域やダーウェント川でもクジラが見られます。[38]南オーストラリア州では、グレートオーストラリアンバイト海洋公園周辺や、アデレードに近いビクターハーバーでクジラが見られます。[39]

オーストラリア東部では、太平洋沿岸の多くの場所で本エールウォッチングが楽しめます。岬からは、南へ回遊するクジラの姿がよく見られます。時には、シドニー港にまで到達するクジラもいます。

ニューサウスウェールズ州国立公園野生生物局は、2010年の5月から11月の南部本エールウォッチングのピークシーズン[40]に、本エールウォッチングサイトを開設して積極的な役割を果たしました[41]。



2000年12月、カイコウラでのホエールウォッチング



クイーンズランド州ゴールドコースト沖で目撃されたザトウクジラ2頭



西オーストラリア州チェインズ沖のミナミセミクジラ

# 捕鯨とホエールウォッチング

3大捕鯨国（カナダ、グリーンランド、ノルウェー）では、ホエールウォッチング産業が成長しています。次に多い4つの捕鯨国（日本、アメリカ、ロシア、アイスランド）でもホエールウォッチング産業が成長しています。実際、アイスランドは1994年から1998年にかけて、世界で最も急速に成長したホエールウォッチング産業を有していました。[1]

## カナダ

カナダでは、ホエールウォッチングと狩猟は異なる地域で行われています。前者は主に大西洋岸と太平洋岸で、後者はもっぱら北極圏で行われています。ホエールウォッチングは、セントローレンス川、チャーチル近郊のハドソン湾西部、ブリティッシュコロンビアで行われています。狩猟はハドソン湾東部（ケベック州ヌナビック）、ヌナブト準州、ポーフォート海で行われています。研究者は、狩猟は収入よりも多くの資源を必要とするため、狩猟地域は狩猟よりもホエールウォッチングからより多くの利益を得るだろうと示唆しています。[42] 2018年、カナダは人間とクジラの接触を減らすことを目的とした新しい規制を導入しました。これらの規則に従い、すべての船舶は以前よりもクジラから遠ざかる必要があります。ザトウクジラと一緒にシュノーケリングをするなど、一部のアクティビティは禁止されています。[43]



ニューブランズウィック州セントアンドリュースのホエールウォッチング事業。

## グリーンランド

グリーンランドにはディスコ湾[44]とヌーク[45]で小規模なホエールウォッチング事業が行われています。どちらの地域でもシロイルカの狩猟が行われています。[46]誰が狩猟に参加してその肉を食べることが許されているかをめぐって論争が起きています。[47]

## ノルウェー

生きたクジラ目の観察を楽しむことは、ノルウェー国内の捕鯨産業とはかなり切り離されていますが、近年、特にアンドフィヨルド（ヴェステローレン島とトロムス島）とトロムソ周辺では、ホエールウォッチングが全国的に人気の観光アトラクションになっています。



ノルウェー、ティスフィヨルド近郊のシャチ

- 特筆すべきことに、2014年に反捕鯨世論が急上昇した。妊娠している可能性のあるミンククジラの ハイコ（ハイコは、シャチのケイコと、その安全を監視している地元の鯨類研究者ハイケ・ヴェスター氏にちなんで名付けられた）が、何年も大型クジラが目撃されていなかったロフォーテン諸島の非常に浅いフィヨルドに避難することで捕鯨船を振り切ることに成功したのだ。これにより、地元住民は鯨類を間近で見える機会を得た。ハイコの出現はすぐに地元住民の関心の高まりをもたらした。[48]時が経つにつれて、ハイコは国内外でより多くの関心を集め、ノルウェーの捕鯨産業への疑問や反対が強まった。

## 日本

エーリッヒ・ホイトをはじめとする自然保護論者は、クジラは生きている状態で観察されている方が死んでいるよりも価値があると主張している。<sup>[5]</sup>その目的は、各国政府に捕鯨活動の縮小を説得することである。この議論は国際捕鯨委員会で続いている。特に捕鯨国は、鯨肉やその他の製品の不足により価値が高まっていると不満を述べている。しかし、鯨肉市場は崩壊しており、日本では政府が学校での配布やその他のプロモーションを通じて市場を補助している。1997年には、2,000トンの鯨肉が3,000万ドルで売却された。10トンのミンククジラであれば15万ドルの価値があったことになる。一頭のクジラの価値をどのように評価するかについては合意が得られていないが、その真の価値はおそらくはるかに高い。しかし、ホエールウォッチングに携わるほとんどの沿岸地域社会から、捕鯨産業によって動物が殺されるよりも利益が得られ、その利益が地域社会全体に水平分配されることは明らかである。<sup>[1][5]</sup>



江戸時代（18～19世紀）のザトウクジラの絵



御蔵島に生息するインド太平洋バンドウイルカ

- 国内では、ホエールウォッチング事業者と捕鯨者との間で紛争や小競り合いが発生している。例えば、ウォッチング船の目の前で捕鯨が行われ、乗船していた国内外の乗客に不快感を抱かせたほか、2007年には根室海峡でインターネット上で国内紛争が広がる事態となった。<sup>[49]</sup>地元のツアーオペレーターは、ツチクジラやイシイルカといった狩猟対象種が、この地域での捕鯨シーズンには姿を消したり、近づきにくくなったりすることがあると確認している。<sup>[50]</sup>本州東半分の沖合と北海道の広い範囲、特に網走沖、仙台湾、千葉沿岸で行われてきた商業捕鯨と調査捕鯨によって引き起こされた沿岸水域におけるミンククジラとツチクジラの近年の顕著な減少と消失（または歴史的な生息地の放棄）により、多くの地域で両種の日撃数が劇的に減少し、捕鯨業者は操業範囲を変更せざるを得なくなり、室蘭のウォッチング業者は、その地域でのミンククジラの深刻な減少と日撃率の低さにより、捕鯨が業者の利益に影響を与えていると主張した。<sup>[51]</sup>ここ数十年で日本海でのツチクジラの捕獲は停止しており、この間にクジラはより友好的になったと言われているが、日本海で商業捕鯨が再開され、鯨類保護活動家の間で懸念を引き起こしている。
- 日本初のホエールウォッチングは1998年に小笠原諸島で「芸者連鯨人連」という団体によって実施された。この団体は国内外の著名人や著名な鯨類研究者、自然保護活動家で構成されており、ロジャー・ペイン、エリック・ホイト、リチャード・オリバー、ジム・ダーリング、ジョン・フォード、岩本球策（漫画家）、植木太一（サイエンスライター）、宮崎信行（東京大学大気海洋研究所所長）、望月信明（1990年に小笠原諸島で北太平洋セミクジラの水中共写を記録した世界初の鯨写真家の一人）、佐久間純子（フリーランス）などが名を連ねていた。<sup>[52]</sup>この間、団体が目的地に到着するまで、農林水産省やその他の団体、匿名の個人が団体の動きを監視し、ツアーを実施しないよう圧力をかけようとした。<sup>[53]</sup>この運動以前にも、鰐脚類を含む海洋哺乳類の保護を主張する人々や、違法で過剰な捕鯨を是正しようとする個人（日本の捕鯨産業に同調していたCWニコルを含む）や、日本で取材活動を行った国内メディア<sup>[54]</sup>が差別を受けてきた。<sup>[53]</sup>その中には、地域社会から追放され、後にホエールウォ

ツチングの運営者となった元漁師も含まれている。<sup>[55]</sup>網走や室戸などでは、元捕鯨船員やイルカ漁師によって他のツアーがいくつか運営されてきた。

## ロシア

ロシアのホエールウォッチングは、オホーツク海沿岸のカムチャッカ半島沖で行われるシャチの観察を主な目的としています。<sup>[56]</sup><sup>[57]</sup>シロイルカはオホーツク海だけでなく、さらに北の海域でも捕獲されています。クジラ・イルカ保護協会のエリック・ホイト氏は、ロシア国内でホエールウォッチングを展開できる他の地域を特定しています。<sup>[58]</sup>

## アイスランド

2003年8月にアイスランドで捕鯨が再開されると、クジラの個体数増加が魚類の個体数を減少させると主張する漁師などの捕鯨推進派団体は、持続可能な捕鯨とホエールウォッチングは共存できると主張した。フーサヴィーク鯨博物館学芸員アスビョルン・ビョルグヴィンソンなどのホエールウォッチングのロビイストは、船に非常に接近し、ホエールウォッチングツアーの楽しみの多くを提供する最も好奇心の強いクジラが最初に捕獲されるだろうと反論している。一方、ハイノースアライアンスなどの捕鯨推進派団体は、アイスランドの一部のホエールウォッチング会社は反捕鯨団体から資金提供を受けているからこそ生き残っているのだと主張している。2020年、アイスランドはCOVID-19パンデミックによる制限のために捕鯨活動を中止し、日本への販売減少によって収穫の実現可能性が制限された。<sup>[59]</sup><sup>[60]</sup>同年、国内市場をターゲットとした唯一の会社によるミンククジラの捕鯨が永久に終了しました。<sup>[61]</sup>パンデミックによる制限が続いていることと、ホエールウォッチング観光の着実な増加を踏まえ、2021年の夏の捕鯨シーズンについても同様の決定が下されました。<sup>[62]</sup>



子連れのシロナガスクジラ、オラフスヴィーク、アイスランド

## ポルトガル

一方、アゾレス諸島政府は、ホエールウォッチングを含む観光を中心とした経済政策を推進してきました。1970年代初頭にアゾレス諸島で捕鯨が衰退すると、捕鯨に携わっていた多くのコミュニティ（ファイアル島、テルセイラ島、サンミゲル島、ピコ島などの村や町を含む）が、夏の間、クジラの回遊経路に沿って移動するホエールウォッチングサービスの拠点へと変貌を遂げ、古い建物や工場は博物館へと転用されました。



ミンククジラのスパイホッピング、アゾレス諸島、ポルトガル

## 参照

- [クジラの浮上行動](#)
- [シドニーでのホエールウォッチング](#)

## 参考文献

1. Hoyt, E. 2009. ホエールウォッチング。海洋哺乳類百科事典第2版 (Perrin, WF、B. Würsig、JGM Thewissen編) Academic Press、サンディエゴ、カリフォルニア州、pp1219-1223。
2. O'Connor, S.、Campbell, R.、Cortez, H.、Knowles, T.、2009、「Whale Watching Worldwide: tourism numbers, expenses and extending economic benefits、米国マサチューセッツ州ヤーマスの国際動物福祉基金からの特別レポート」、Economists at Large が作成。  
<http://www.ecolarge.com/work/whale-watching-worldwide/>
3. フォード, ジョン・KB; エリス, グレアム・M; バルコム, ケネス・C. (2000). 『シャチ：ブリティッシュコロンビア州とワシントン州におけるオルキヌスの自然史と系譜』 (第2版) .バンクーバー, BC: UBC Press. p. 97. ISBN 9780774808002。
4. Carwardine, M. 1995. *Natural Classic*、BBC Wildlife、7月、p79。
5. Hoyt, E. 2001. 「ホエールウォッチング2001：世界の観光客数、支出、そして拡大する社会経済的利益」国際動物福祉基金、マサチューセッツ州ヤーマスポート、米国、pp. 1-157。
6. ホイト, E. 2012. ホエールウォッチングのブループリント -I. 海洋エコツーリズム事業の立ち上げ. ネイチャー・エディションズ, ノース・バーウィック, スコットランド [ISBN 978-1-908732-00-2 (電子書籍)]
7. 1992年海洋哺乳類保護規則 § 20 (<http://www.legislation.govt.nz/regulation/public/1992/0322/latest/DLM168840.html>) (b)
8. 「ウルグアイが『クジラとイルカの保護区』に・Global Voices」 (<https://globalvoices.org/2013/12/16/uruguay-becomes-a-sanctuary-for-whales-and-dolphins/>) Global Voices 2013年12月16日. 2016年7月11日閲覧。 (<https://globalvoices.org/2013/12/16/uruguay-becomes-a-sanctuary-for-whales-and-dolphins/>)
9. ミルスタイン、テマ (2016). 「パフォーマーのメタファー：母なる自然は同じショーを二度見せてくれない」 (<https://dx.doi.org/10.1080/17524032.2015.1018295>) .環境コミュニケーション. **10** (2): 227– 248. doi : 10.1080/17524032.2015.1018295 (<https://doi.org/10.1080%2F17524032.2015.1018295>) . hdl : 1959.4/unsworks\_77060 ([https://hdl.handle.net/1959.4%2Funsworks\\_77060](https://hdl.handle.net/1959.4%2Funsworks_77060)) . (<https://dx.doi.org/10.1080/17524032.2015.1018295>) (<https://doi.org/10.1080%2F17524032.2015.1018295>) ([https://hdl.handle.net/1959.4%2Funsworks\\_77060](https://hdl.handle.net/1959.4%2Funsworks_77060))
10. ミルスタイン、テマ (2008). 「クジラが自ら語る時：野生生物観光における媒介力としてのコミュニケーション」 (<https://dx.doi.org/10.1080/17524030802141745>) .環境コミュニケーション. **2** (2): 173– 192. doi : 10.1080/17524030802141745 (<https://doi.org/10.1080%2F17524030802141745>) . hdl : 1959.4/unsworks\_77050 ([https://hdl.handle.net/1959.4%2Funsworks\\_77050](https://hdl.handle.net/1959.4%2Funsworks_77050)) . (<https://dx.doi.org/10.1080/17524030802141745>) (<https://doi.org/10.1080%2F17524030802141745>) ([https://hdl.handle.net/1959.4%2Funsworks\\_77050](https://hdl.handle.net/1959.4%2Funsworks_77050))
11. <http://www.oceanalliance.org> 2015年3月4日アーカイブ、 (<https://web.archive.org/web/20150304202223/http://www.oceanalliance.org/>)Wayback Machineオーシャンアライアンスウェブサイト
12. 「ウルグアイでクジラウォッチングに最適な場所5選」 (<http://guruguay.com/whale-watching/>) 2015年6月4日. 2016年7月11日閲覧。 (<http://guruguay.com/whale-watching/>)
13. “デスクュブリエンド ウルグアイ – モンテビデオポータル” (<http://www.descubriendouruguay.com/auc.aspx?176450,1276,0,,0>) . *descubriendouruguay.com*。2016年7月11日に取得。 (<http://www.descubriendouruguay.com/auc.aspx?176450,1276,0,,0>)

14. インディペンデント 2009年7月18日; シー・ウォッチ・ファウンデーション; および多くの英国のイルカウォッチングガイド
15. YouTubeのニューヨーク港のクジラ (<https://www.youtube.com/watch?v=PZAF7bk8O14>)
16. ロス、バーバラ (2011年1月30日) 「ニューヨーク市にクジラが帰ってくる：市街地近海に巨大哺乳類が再び出現、観光客を惹きつける」 ([http://www.nydailynews.com/ny\\_local/2011/01/30/2011-01-30\\_whales\\_return\\_to\\_new\\_york\\_city\\_massive\\_mammals\\_appearing\\_again\\_in\\_seas\\_near\\_city.html](http://www.nydailynews.com/ny_local/2011/01/30/2011-01-30_whales_return_to_new_york_city_massive_mammals_appearing_again_in_seas_near_city.html)) デイリーニュース、ニューヨーク。 ([http://www.nydailynews.com/ny\\_local/2011/01/30/2011-01-30\\_whales\\_return\\_to\\_new\\_york\\_city\\_massive\\_mammals\\_appearing\\_again\\_in\\_seas\\_near\\_city.html](http://www.nydailynews.com/ny_local/2011/01/30/2011-01-30_whales_return_to_new_york_city_massive_mammals_appearing_again_in_seas_near_city.html))
17. 「バージニアビーチでのホエールウォッチングは巨大なスリルをもたらす」 (<http://www.visitvirginiabeach.com/visitors/explore/articles/whale-watching>) 2015年5月14日閲覧。 (<http://www.visitvirginiabeach.com/visitors/explore/articles/whale-watching>)
18. 「カヤック・コースティング、SRQマガジン(2015)」 (<http://www.srqmagazine.com/articles/146/Kayak-Coasting>)。2017年4月2日閲覧。 (<http://www.srqmagazine.com/articles/146/Kayak-Coasting>)
19. ホイト, E. 2011. 『クジラ、イルカ、ネズミイルカの海洋保護区：鯨類生息地の保全と計画のための世界ハンドブック』 Earthscan/Routledge および Taylor & Francis、ロンドンおよびニューヨーク、464ページ。+ 予備試験13ページ + 図版12ページ ISBN 978-1-84407-763-2
20. 「The Pacific」 (<https://web.archive.org/web/20140831154052/http://www.colombia.travel/en/international-tourist/vacations-holidays-where-to-go/pacific-coast-travel-guide>) . コロンビア・トラベル. 2014年8月31日時点のオリジナル (<https://www.colombia.travel/en/international-tourist/vacations-holidays-where-to-go/pacific-coast-travel-guide>) よりアーカイブ。2015年5月14日閲覧。 (<https://web.archive.org/web/20140831154052/http://www.colombia.travel/en/international-tourist/vacations-holidays-where-to-go/pacific-coast-travel-guide>) (<https://www.colombia.travel/en/international-tourist/vacations-holidays-where-to-go/pacific-coast-travel-guide>)
21. 「Orca Network」 (<https://www.orcanetwork.org/>) 2022年10月26日閲覧。 (<https://www.orcanetwork.org/>)
22. 「シャチ、シャチの鳴き声：騒音公害がシャチに及ぼす害」 (<https://www.eaglewingtours.com/articles/killer-whales-killer-sounds-how-noise-pollution-is-harming-killer-whales/>) イーグル・ウィング・ツアーズ、2015年1月5日。 (<https://www.eaglewingtours.com/articles/killer-whales-killer-sounds-how-noise-pollution-is-harming-killer-whales/>)
23. 「ホエールウォッチング - オレゴン州立公園 (<https://stateparks.oregon.gov/index.cfm?do=things-to-do.whale-watching>)」 *stateparks.oregon.gov*。 (<https://stateparks.oregon.gov/index.cfm?do=things-to-do.whale-watching>)
24. 「北東太平洋でのホエールウォッチング：カリフォルニア沿岸」 (<http://2seewhales.com/california-coast-whale-watching-facts/>) 2SeeWhales . 2015年8月24日閲覧。 (<http://2seewhales.com/california-coast-whale-watching-facts/>)
25. Kramer, Jennifer (2017年6月1日). 「バハで最高のホエールウォッチング」 (<https://moon.com/2017/06/best-baja-whale-watching/>) . *Moon Travel Books* . 2018年11月23日閲覧。 (<https://moon.com/2017/06/best-baja-whale-watching/>)

26. アマゾン、アリシア、パーソンズ、ECM (2018年3月)。「北米太平洋岸におけるコククジラウォッチング産業の持続可能性の評価」『(https://www.researchgate.net/publication/324090886)持続可能な観光ジャーナル』 **26** (1): 1362–1380 . Bibcode : 2018JSusT..26.1362A (https://ui.adsabs.harvard.edu/abs/2018JSusT..26.1362A) . doi : 10.1080/09669582.2018.1449848 (https://doi.org/10.1080%2F09669582.2018.1449848) . (https://www.researchgate.net/publication/324090886) (https://ui.adsabs.harvard.edu/abs/2018JSusT..26.1362A) (https://doi.org/10.1080%2F09669582.2018.1449848)
27. Crampton, Vincent (2018年8月3日)。「カボ・サン・ルーカスでつまづく男性」(https://www.orlandosentinel.com/travel/os-travel-man-tripping-to-cabo-san-lucas-20180803-story.html) . *OrlandoSentinel.com* . 2018年11月23日閲覧。(https://www.orlandosentinel.com/travel/os-travel-man-tripping-to-cabo-san-lucas-20180803-story.html)
28. Sorensen, Gary (2018年10月20日)。「マウイ島やプエルトバジャルタで贅沢な時間を過ごす」(https://www.thespectrum.com/story/travel/2018/10/20/travel-tips-whale-watching-maui-puerto-vallarta/1680420002/) . *The Spectrum & Daily News* . 2018年11月23日閲覧。(https://www.thespectrum.com/story/travel/2018/10/20/travel-tips-whale-watching-maui-puerto-vallarta/1680420002/)
29. パターソン、ケント (2018年4月) 「メキシコでホエールウォッチングブームが期待を高める」(https://www.whalesinmexico.com/wp-content/uploads/2018/10/EcoAmericas-April-2018.pdf) (PDF) *EcoAméricas* . 2018年11月23日閲覧。(https://www.whalesinmexico.com/wp-content/uploads/2018/10/EcoAmericas-April-2018.pdf)
30. キンタナル・ヒノホサ、ベアトリス (2007年8月)。「オアハカ：ジュビロ・デ・ロス・セントィドス」(http://www.mexico desconocido.com.mx)。ギア・メキシコ・デスコノシド：オアハカ。 **137** : 8. (http://www.mexico desconocido.com.mx)
31. 「季節外れにカリフォルニア沿岸で70フィートのシロナガスクジラが珍しく目撃され、驚きを呼ぶ」(https://www.ocregister.com/2021/03/30/rare-out-of-season-sighting-of-70-foot-blue-whale-surprises-on-the-sea)マーキュリー・ニュース2021年3月30日 . 2021年10月21日閲覧。(https://www.ocregister.com/2021/03/30/rare-out-of-season-sighting-of-70-foot-blue-whale-surprises-on-the-sea)
32. 「サンクチュアリ・オーシャン・カウント：ザトウクジラの調査と行動データの分析 2002～2010年」(http://hawaii humpbackwhale.noaa.gov/involved/pdfs/Part1\_2010OCReport.pdf) (PDF) 2010年7月1日. 2017年1月7日閲覧。(http://hawaii humpbackwhale.noaa.gov/involved/pdfs/Part1\_2010OCReport.pdf)
33. 「ハワイ島のクジラ目撃統計」(https://www.lovebigisland.com/big-island-whale-watching/#whale-season) Lovebigisland . 2017年1月7日閲覧。(https://www.lovebigisland.com/big-island-whale-watching/#whale-season)
34. 「WWF-フィリピン」(https://web.archive.org/web/20150404054642/http://wwf.org.ph/wwf3/news/1) 。 2015年4月4日時点のオリジナル (http://wwf.org.ph/wwf3/news/1)よりアーカイブ。2015年5月14日閲覧。(https://web.archive.org/web/20150404054642/http://wwf.org.ph/wwf3/news/1) (http://wwf.org.ph/wwf3/news/1)

35. グアラ・カタルーニャ、セザール。ヒュッケ＝ガエテ、ロドリゴ。ルイス・トロメル、ホルヘ (2011)。「チリ、パタゴニア北部のホエールウォッチングの機会」 (<https://www.researchgate.net/publication/280319404>)。パンフィックニュース。35。 (<https://www.researchgate.net/publication/280319404>)
36. Zamorano-Abramson, José; Gibbons, Jorge; Capella, Juan (2010)。「チリ、アイセン北部の入江における鯨類の多様性と夏季分布」 ([https://scielo.conicyt.cl/scielo.php?pid=S0718-686X2010000100012&script=sci\\_arttext](https://scielo.conicyt.cl/scielo.php?pid=S0718-686X2010000100012&script=sci_arttext))。 *Anales del Instituto de la Patagonia* . 38 (1): 151– 157. doi : 10.4067/S0718-686X2010000100012 (<https://doi.org/10.4067%2FS0718-686X2010000100012>)。 2019年1月10日閲覧。 ([https://scielo.conicyt.cl/scielo.php?pid=S0718-686X2010000100012&script=sci\\_arttext](https://scielo.conicyt.cl/scielo.php?pid=S0718-686X2010000100012&script=sci_arttext)) (<https://doi.org/10.4067%2FS0718-686X2010000100012>)
37. 「Whale Spotting」 (<https://web.archive.org/web/20140914141221/http://www.abc.net.au/oceans/whale/spot.htm>)。オーストラリア放送協会。2014年9月14日。2014年9月14日時点のオリジナル (<http://www.abc.net.au/oceans/whale/spot.htm>)よりアーカイブ。2018年4月6日閲覧。 (<https://web.archive.org/web/20140914141221/http://www.abc.net.au/oceans/whale/spot.htm>) (<http://www.abc.net.au/oceans/whale/spot.htm>)
38. 「Tourism Tasmania :: Whales & Dolphins」 (<https://web.archive.org/web/20140818212129/http://www.tourismtasmania.com.au/media/facts/whales>)。 *tourismtasmania.com.au*。2014年8月18日時点のオリジナル (<http://www.tourismtasmania.com.au/media/facts/whales>)よりアーカイブ。2018年4月6日閲覧。 (<https://web.archive.org/web/20140818212129/http://www.tourismtasmania.com.au/media/facts/whales>) (<http://www.tourismtasmania.com.au/media/facts/whales>)
39. 「野生のクジラとイルカが見られる場所」 (<https://web.archive.org/web/20140127051045/http://www.environment.gov.au/topics/marine/marine-species/cetaceans/whale-and-dolphin-watching>)オーストラリア連邦環境・水・文化遺産・芸術省2009年1月12日オリジナル (<http://www.environment.gov.au/topics/marine/marine-species/cetaceans/whale-and-dolphin-watching#where>)より2014年1月27日時点のアーカイブ。2010年1月11日閲覧。 (<https://web.archive.org/web/20140127051045/http://www.environment.gov.au/topics/marine/marine-species/cetaceans/whale-and-dolphin-watching>) (<http://www.environment.gov.au/topics/marine/marine-species/cetaceans/whale-and-dolphin-watching#where>)
40. 「Travelicious Australia – Nelson Bay Hotels」 (<https://web.archive.org/web/20160306212838/http://nelsonbayhotels.net.au/nelson-bay-activities/interesting-information-whale-watching-port-stephens>)。2016年3月6日時点のオリジナル (<http://www.nelsonbayhotels.net.au/nelson-bay-activities/interesting-information-whale-watching-port-stephens/>)よりアーカイブ。2015年5月14日閲覧。 (<https://web.archive.org/web/20160306212838/http://nelsonbayhotels.net.au/nelson-bay-activities/interesting-information-whale-watching-port-stephens>) (<http://www.nelsonbayhotels.net.au/nelson-bay-activities/interesting-information-whale-watching-port-stephens/>)
41. 「2015 NSW ホエールウォッチングシーズン」 (<https://web.archive.org/web/20150516063743/http://www.wildaboutwhales.com.au/>)。 *Wild About Whales*。NSW National Parks。2015年5月16日時点のオリジナル (<http://www.wildaboutwhales.com.au/>)よりアーカイブ。 (<https://web.archive.org/web/20150516063743/http://www.wildaboutwhales.com.au/>) (<http://www.wildaboutwhales.com.au/>)

42. Hoover C, Bailey M, Higdon J, Ferguson SH, Sumalia R (2013年3月). 「ヌナブト準州ハドソン湾におけるイッカクとシロイルカの狩猟の経済的価値の推定」 (<https://arctic.journalhosting.ucalgary.ca/arctic/index.php/arctic/article/view/4261/4242>) 北米北極研究所. **66** : 1–16 . (<https://arctic.journalhosting.ucalgary.ca/arctic/index.php/arctic/article/view/4261/4242>)
43. リード、ジョアンナ (2021年9月15日) 「カナダがホエールウォッチングを難しくしている理由」 (<https://web.archive.org/web/20210915182546/https://www.nationalgeographic.com/travel/article/why-canada-is-making-it-harder-to-go-whale-watching>) ナショナルジオグラフィック。2021年9月15日時点のオリジナル (<https://www.nationalgeographic.com/travel/article/why-canada-is-making-it-harder-to-go-whale-watching?>) よりアーカイブ。 (<https://web.archive.org/web/20210915182546/https://www.nationalgeographic.com/travel/article/why-canada-is-making-it-harder-to-go-whale-watching>) (<https://www.nationalgeographic.com/travel/article/why-canada-is-making-it-harder-to-go-whale-watching?>)
44. Macfarlane, Zoe (2018年11月20日). 「グリーンランド：クールな首都」 ([https://www.nzherald.co.nz/travel/news/article.cfm?c\\_id=7&objectid=12162996](https://www.nzherald.co.nz/travel/news/article.cfm?c_id=7&objectid=12162996)) . ニュージーランド・ヘラルド. ISSN 1170-0777 . (<https://search.worldcat.org/issn/1170-0777>) 2018年12月1日閲覧。 ([https://www.nzherald.co.nz/travel/news/article.cfm?c\\_id=7&objectid=12162996](https://www.nzherald.co.nz/travel/news/article.cfm?c_id=7&objectid=12162996)) (<https://search.worldcat.org/issn/1170-0777>)
45. バローネ、ジャニーン (2018年8月15日) 「グリーンランド、ヌークで行くべき5つの場所」 (<https://www.nytimes.com/2018/08/15/travel/five-places-to-go-in-nuuk-greenland.html>) ニューヨーク・タイムズ。2018年12月1日閲覧。 (<https://www.nytimes.com/2018/08/15/travel/five-places-to-go-in-nuuk-greenland.html>)
46. Heide-Jørgensen, Mads Peter (1994). 「西グリーンランドにおけるシロナガスクジラ (*Delphinapterus leucas*) とイッカク (*Monodon monoceros*) の分布、利用、個体群状況」 (<https://www.researchgate.net/publication/285286297>) *Meddr Grønland, Biosci.* **39** : 135– 149. doi : 10.7146/mogbiosci.v39.142541 (<https://doi.org/10.7146%2Fmogbiosci.v39.142541>) . (<https://www.researchgate.net/publication/285286297>) (<https://doi.org/10.7146%2Fmogbiosci.v39.142541>)
47. 「グリーンランドと、大型クジラの捕獲枠増加を求める同国における『地域社会』概念の変遷」 (<https://web.archive.org/web/20181202070632/https://us.whales.org/blog/2012/07/greenland-and-evolving-concept-of-local-community-in-relation-to-its-demands-for>)。WDC、クジラ・イルカ保護協会。2012年7月9日。2018年12月2日時点のオリジナル (<https://us.whales.org/blog/2012/07/greenland-and-evolving-concept-of-local-community-in-relation-to-its-demands-for>) よりアーカイブ。2018年12月1日閲覧。 (<https://web.archive.org/web/20181202070632/https://us.whales.org/blog/2012/07/greenland-and-evolving-concept-of-local-community-in-relation-to-its-demands-for>) (<https://us.whales.org/blog/2012/07/greenland-and-evolving-concept-of-local-community-in-relation-to-its-demands-for>)
48. McEnally C. (2014). 「捕鯨船から逃げ出した一頭のクジラが、ノルウェーの鯨肉に対する考え方を変えつつある」 (<http://www.onegreenplanet.org/animalsandnature/heiko-the-minke-whale-is-changing-norwegian-attitudes-on-whale-meat/>) . The One Green Planet . 2015年1月15日閲覧。 (<http://www.onegreenplanet.org/animalsandnature/heiko-the-minke-whale-is-changing-norwegian-attitudes-on-whale-meat/>)
49. 毎日新聞、2007、<クジラ>ウォッチングの観光客の目前で捕獲知床沖

50. 知床ネイチャークルーズ

51. "トップページ - イルカ・鯨ウォッチングとフィッシングのKKエルム - 株式会社エルム" (<http://web.archive.org/web/20151020131946/http://kk-elm.jp/>) . 2015年10月20日のオリジナル (<http://www.kk-elm.jp/>)からアーカイブ。2015年5月14日に取得。 (<https://web.archive.org/web/20151020131946/http://kk-elm.jp/>) (<http://www.kk-elm.jp/>)
52. 岩本久則。 「僕が出会った世界のクジラ人たち」 ([http://www24.big.or.jp/~kyusoku/w\\_peapl.htm](http://www24.big.or.jp/~kyusoku/w_peapl.htm)). 2015年1月15日に取得。 ([http://www24.big.or.jp/~kyusoku/w\\_peapl.htm](http://www24.big.or.jp/~kyusoku/w_peapl.htm))
53. 小原秀夫、1996、『人間は野生動物を守るか』(単行本)、岩波書店
54. アエラ、(2008) 『捕鯨ナショナリズムを煽る農水省の罪』
55. 「イルカ狩りからイルカウォッチングへ」 ([https://web.archive.org/web/20150704025316/http://bluevoice.org/news\\_dolphinwatching.php](https://web.archive.org/web/20150704025316/http://bluevoice.org/news_dolphinwatching.php)) BlueVoice.org 2015年7月4日時点のオリジナル ([http://www.bluevoice.org/news\\_dolphinwatching.php](http://www.bluevoice.org/news_dolphinwatching.php))よりアーカイブ。2015年1月15日閲覧。 ([https://web.archive.org/web/20150704025316/http://bluevoice.org/news\\_dolphinwatching.php](https://web.archive.org/web/20150704025316/http://bluevoice.org/news_dolphinwatching.php)) ([http://www.bluevoice.org/news\\_dolphinwatching.php](http://www.bluevoice.org/news_dolphinwatching.php))
56. 「クジラとイルカウォッチング完全ガイド」 (<https://www.independent.co.uk/travel/news-and-advice/the-complete-guide-to-whale-dolphin-watching-1750980.html>) インディペンデント紙。2018年12月1日閲覧。 (<https://www.independent.co.uk/travel/news-and-advice/the-complete-guide-to-whale-dolphin-watching-1750980.html>)
57. 「世界の野生動物と過ごす休暇ベスト50」 (<https://www.telegraph.co.uk/travel/safaris-and-wildlife/best-wildlife-holidays/>) The *Telegraph* 2018年12月1日閲覧。 (<https://www.telegraph.co.uk/travel/safaris-and-wildlife/best-wildlife-holidays/>)
58. ホイト、エーリッヒ (2006)。ロシアのホエールウォッチングと海洋エコツーリズム- *Туристические экскурсии по наблюдению за китами и морской экотуризм в России*. クジラとイルカ保護協会。ISBN 1-901386-56-2。
59. アリエラ・シムケ「アイスランド、2020年にクジラの殺害をやめ、代わりにクジラの観察を選択」 (<https://www.forbes.com/sites/ariellasimke/2020/05/10/iceland-to-stop-killing-whales-in-2020-choosing-to-watch-them-instead>) フォーブス誌。2021年7月27日閲覧。 (<https://www.forbes.com/sites/ariellasimke/2020/05/10/iceland-to-stop-killing-whales-in-2020-choosing-to-watch-them-instead>)
60. キーラン・マルバニー。「アイスランドの商業捕鯨は終了するかもしれない」 (<https://web.archive.org/web/20210309055515/https://www.nationalgeographic.com/science/article/commercial-whaling-may-be-over-iceland>) . ナショナルジオグラフィック。2021年3月9日時点のオリジナル (<https://www.nationalgeographic.com/science/article/commercial-whaling-may-be-over-iceland>)よりアーカイブ。2021年7月27日閲覧。 (<https://web.archive.org/web/20210309055515/https://www.nationalgeographic.com/science/article/commercial-whaling-may-be-over-iceland>) (<https://www.nationalgeographic.com/science/article/commercial-whaling-may-be-over-iceland>)
61. Allen, Liz (2020年5月1日)。「アイスランドのミンククジラ捕獲が正式に終了」 (<https://www.forbes.com/sites/allenelizabeth/2020/05/01/icelands-hunt-for-minke-whales-has-officially-ended/>) . *Forbes* . 2021年7月26日閲覧。 (<https://www.forbes.com/sites/allenelizabeth/2020/05/01/icelands-hunt-for-minke-whales-has-officially-ended/>)

62. 国際動物福祉基金. 「アイスランド：クジラは3年連続で鉋から安全」 (<https://www.prnewswire.com/news-releases/iceland-whales-safe-from-harpoons-for-a-third-year-301312638.html>) . *PR Newswire*. 2021年7月27日閲覧。 (<https://www.prnewswire.com/news-releases/iceland-whales-safe-from-harpoons-for-a-third-year-301312638.html>)

---

## さらに読む

---

- 海洋哺乳類百科事典、編者：ペリン、ヴルジグ、テヴィッセン、ISBN 0-12-551340-2特に、Erich Hoytによる「Whale watching」という記事。
- ホエールウォッチング2001：世界の観光数、支出、そして拡大する社会経済的利益、エリック・ホイト、ISBN 1-901002-09-8。
- ホエールウォッチング、ディスカバリー・トラベル・アドベンチャーズ・インサイトガイド。ISBN 1-56331-836-9。
- 『ホエールウォッチャーのガイド：北米のホエールウォッチング旅行』、パトリシア・コリガン、ISBN 1-55971-683-5。
- アイスランドのクジラとホエールウォッチング、マーク・カーワーディン、ISBN 9979-51-129-X。
- クジラの足跡をたどる、マーク・カーワーディン、ISBN 1-899074-00-7
- ミルスタイン T, 2016, 「パフォーマーのメタファー：母なる自然は同じショーを二度見せてくれない」, 環境コミュニケーション, 10, pp. 227 - 248, <http://dx.doi.org/10.1080/17524032.2015.1018295>
- ミルスタイン・T, 2008, 「クジラが自ら語る時：野生生物観光における媒介力としてのコミュニケーション」『環境コミュニケーション：自然と文化のジャーナル』 2, pp. 173 - 192, <http://dx.doi.org/10.1080/17524030802141745>

---

## 外部リンク

---

- クジラ・イルカ保護協会 (<http://www.wdcs.org/>)、クジラ保護活動家
- 国際動物福祉基金 (<http://www.ifaw.org/>) (世界各地の様々なホエールウォッチング規制を含む)
- 国際捕鯨委員会 (<https://web.archive.org/web/20110208193224/http://www.iwcoffice.org/>)、「捕鯨産業の秩序ある発展を可能にし、鯨類資源の適切な保全を図る」
- オセアニアプロジェクト (<http://www.oceania.org.au/index.html>)、クジラ、イルカ、そして海を守る
- ACCOBAMS (<https://web.archive.org/web/20160304063609/http://www.accobams.org/2006.php/pages/show/41>)、黒海、地中海及び大西洋隣接地域における鯨類の保全に関する協定
- 惑星クジラ：人類にクジラとイルカについて教える (<https://web.archive.org/web/20140107061703/http://www.planetwhale.com/>)